

第1回中部圏広域地方計画学識者会議（概要）

日時：平成19年6月18日（火） 10:00～12:00

場所：CASTLE PLAZA（キャッスルプラザ）鳳凰（北）

1. 開会

（事務局：上田中部圏広域地方計画推進室長）

- ・中部圏広域地方計画推進室という組織がこの4月1日に発足。
- ・古田委員、重川委員は欠席。

（中部地方整備局：金井局長）

- ・中部圏でどういう広域地方計画ができるのか、全国的にも注目されている。
- ・新しい概念をたくさん出していただき、地域の持続的発展に寄与できればと考えている。
- ・年度内には第二名神、東海北陸道がつながり、スーパー中枢港湾の整備等、社会資本で地域をサポートできるいい状況が続くのではないかと考えている。
- ・一方で、伊勢湾や、堀川の環境問題が出てきている。
- ・他の地域との連携等も大きな課題となっている。

2. 議事

（事務局：上田中部圏広域地方計画推進室長） 議事進行

1) 中部圏広域地方計画学識者会議運営要領について

（事務局：石原中部圏広域地方計画推進室副室長） 運営要領説明

（事務局：上田中部圏広域地方計画推進室長）

- ・運営要領について意見聴取→全委員承認

2) 座長の選出

（須田委員）

- ・奥野先生にお願いしてはどうか。奥野先生は、国土形成計画計画部会の座長代理もされており、国土形成計画に深く関わりがある。

（事務局：上田中部圏広域地方計画推進室長）

- ・奥野委員を座長で異議はないか。→全委員承諾

（奥野座長）

- ・この会議の役割は二つ。第一は、広域地方計画に対して意見を述べる事。長期的な視点で、10年程度の計画をつくっていく。第二は、他の広域圏域の良き先例となる役割を担

っている。中部のためだけでなく、日本にとっても大事な会議である。

3) 国土形成計画について

① 国土形成計画の概要について

② 全国計画の概要(素案)について

(国土計画局大都市圏計画課：下川補佐) 資料2、資料3説明

4) 中部圏広域地方計画策定に向けて

(事務局：石原中部圏広域地方計画推進室副室長) 資料6、資料7説明

○テーマ1:「今後の中部圏の姿とは？」について

① 中部圏の将来像と実現に向けた基本方針(案)について

② 中部圏広域地方計画策定スケジュール(予定)

③ 討議

(須田委員)

- ・ これからの中部を考えた場合、方向は2つあると考える。1つは従来から言われているように「産業技術の国際中枢圏域」、2つ目は「国際交流中枢圏域」だということ。今後、人口が減ってくると人々のふれあいのチャンスを増やさなければならない。ふれあいが一番大事。
- ・ 1つ目の「産業技術の国際中枢圏域」の問題については、エネルギー問題、産業施設の問題、産業インフラの問題がある。2つ目の「国際交流中枢圏域」からでてくる問題については、観光や国際交流などではないか。
- ・ 前述の2つに関わる全体的な問題として、基礎インフラをどうするか問題がある。
- ・ 2つの中枢圏域の基盤整備として大事なことは、住みよい安全、安心な社会を構築する事と、万博の理念を継承するという事。
- ・ これらを実行する際に必要となるキーワードは、「連携」「役割分担」ではないか。

(竹谷委員)

- ・ 新しい社会の中で中部圏が持つべきキーワードは持続性ではないか。その中身は4つからなる。1つ目は「活力の問題」、2つ目は「循環」、3つ目は「コミュニティ」、4つ目「安心」(安心には、防災以外に、安全・安心の食料の提供、国民が癒しの空間として農村を共有するといった観点も含まれる)
- ・ 農村域は人口減、あるいは高齢化の先細りという形で推移している。
- ・ 中部の持続という視点で捉えた時に、従来の仕組みでは対応できず、その点を考えることが重要。
- ・ 農水省は“攻めの農業”ということも言っているが、なかなか守り切れていない。今後、FTA(自由貿易協定)、EPA(経済連携協定)などの影響により、さらに元気が無くなることが想定される。
- ・ バランスのある中部圏や、前述の4つのキーワードで描かれる中部圏が、今の延長線上

ではなかなか描きにくく、この現状をどのように切り替えていくかを考えるため、この会議はとても重要な役割を担っている。

- ・農村地域にとっては、食料・農業・農村を活かした都市・農村交流型の産業観光が非常に重要。
- ・中部圏が首都圏など三大都市圏の大きな野菜の供給地である事など、引き続き活力を維持していける色々な装置・ノウハウを考えていきたい。
- ・アルプスから伊勢湾等の海までを見る視点も必要。

(渡邊委員)

- ・中部圏は、強い部分である日本経済の牽引者としての従来からの役割、優れた産業技術を持っており、日本の中で中心的な役割をさらに強めていくべき。
- ・中部圏域としての強みとしては、国土のまんなかにあるということ。その利便性、優位性、対応性をフルに生かしていくことが重要。
- ・周辺の人口減少の影響が深刻化しつつあり、そのような地域を多く抱えている。限界集落も非常に多い。ひとたび大きな災害が起きると地域として蘇る事が困難であり人口流出が起きるといった脆弱性も持っている。どのような形で持続性を担保するかが特に重要。
- ・21世紀の社会への課題としては、創造的な圏域を考えるべき。
- ・ITS、環境技術等は、21世紀の世界の中で持続可能な環境共生社会を創造していく、モデル圏域としての役割を担うことができる。
- ・都市と周辺地域の共存、共生社会を考えていくべきであり、これらが国土の持続性を担保していくための一つのモデルになる。
- ・ものづくりの先進地域としての貢献が重要。東アジアとの競争的共存圏域が、中部の国際交流機能の拡大発展の一つの要になる。
- ・国際交流機能の拡大発展としては、観光があげられる。これは産業観光や豊かな歴史・文化資産等、質的に高いものが交流の資産となるため、これらを明確に打ち出す必要がある。
- ・周辺地域に対して経済的に影響力を強めていけるような開放性をポテンシャルとして持つていくことが必要。
- ・中部圏広域地方計画は、開放性があり、外に向かってグローバルに人をひきつけていくような力を蓄え、そのための整備をするといった事を、明確にイメージをしながら将来像を描いていく事がポイントではないか。
- ・中部圏は、「産業技術の競争力」、「豊かな歴史文化資産」という2つの要が、技術的、開放的に創造的なモデルを創っていく事を目指すべき。

(辻本委員)

- ・持続性が大きなキーワードではないか。
- ・持続性がどのように達成されるかということと、その持続性の達成のさせ方が、地方地方でどう違うのかが一つのポイント。対象としなければならないのは、やはり大都市圏を抱える大きな圏域であり、中部圏域と首都圏と近畿圏との違いを際立たせていく必要がある。

- ・社会基盤だけ造っても、社会活動や交流や文化活動が完成されるわけではないため、基盤と人の輪、活動と、人それぞれの意識やライフスタイルの3層から考えるようなものをつくっていかなければならない。
- ・中部は、工業、農業、水産業のバランスが取れており、東京や大阪など大都市圏を抱える圏域とは異なる。外への影響、外からの吸収のバランスが、首都圏と関西圏とは異なる。
- ・名古屋が周辺の圏域に与えるもの、周辺から受けているものについても、3つの圏域では異なっているのではないか。この辺りの弱点を克服する計画を立てていけたらと考えている。
- ・災害に対して非常に脆弱であるため、どんな戦略をもって仕組みを考えていくかがキーになる。

(松尾委員)

- ・基本的な視点としては、まずビジョンを掲げて、それに沿って実現可能なコンセプトを作り出し、課題を整理して、スケジュールをつくる事が必要。
- ・その場合戦略的な視点が必要。戦略性には4つの視点が必須。1つ目は長期的な視点。これは、一時の経済効率性を見るだけではなくて、地域100年の大計で考えるということ。2つ目は、広域的な視点であり、国際性を含む。3つ目は、技術的な視点で、これは科学的な視点を含めた技術者のまなざしが必要。4つ目は、総合的な視点であり、経済、社会、政治、文化等々他分野を視野に全部収めたものが必要。
- ・地域の弱みを把握することが必要。中部は災害常襲地帯であり、この地域が国土の要であるということならば、この地域の安全安心の確保が我が国の安全につながるという自負を持ち、弱みを克服することを考えるべき。
- ・他の地域にない独自の道を探すべき。地域的な魅力を生かすとともに、市民が作り上げてきた環境保全システム、万博の産業遺産などを、オンリー1として生かすべき。オンリー1は必ず世界に通用する。

(伊藤委員)

- ・首都圏、近畿圏と肩を並べる中部圏を今後作っていくというようなことはどこにも書かれていない。実際に、10年、20年先、中部圏はどのような形で日本の国をどのように担っていくのかという基本的なスタンスが書かれていないのではないか。
- ・東京圏、関西圏、中京圏という3つで、日本の未来を支えるという将来像を明確にしておくべき
- ・中部圏は、東京圏と関西圏を両脇に従えた圏であると考え、全国に発信する、あるいは機能する大都市圏としての将来像、21世紀にふさわしい圏域にという、二重の姿を描くべき。

(大坪委員)

- ・愛知県が中心の発想となっており地方の発想というのが入っていない。中部圏という全体でモノを考えることが必要ではないか。愛知県中心の考え方では、東京一極集中の間

題に近いことが起こる恐れあり。

- 50年先の中部圏は、一つの国家のような形になるので、中部の圏域を独自のものと考えることが必要。どういう生き方をするのがここに住んでいる人たちにとって適切なのかということを考えるべき。生きる人たちのためにどうあるべきかという視点が大切。価値の多様化を考えることが大切。
- 日本の教育の問題の中で非常に重要なことは、今後、大学をどうするかということ。75%の人が大学へ進学するような地域をつくらなければいけないのではないかと。それにより、高度な能力をもった人材が地域に貢献できる。そういった発想をこの構想の中に入れるべき。
- 人材の育成は非常に重要。特に重要なのは、政治のリーダーではないか。中部圏を良くさせるには、中部の政治のリーダーのレベルが低くてはいけない。
- 50年先を考えた時、少子化という問題に対し、移民政策をどう考えるかが重要。国際的な人材の活用についての議論が必要。
- 中部圏全体の中で、次の50年間で宝探しをしていくというようなことを考えるというような視点も必要なのではないか。それらの情報を世界に発信していくことが必要。
- 国土を作っていく上で住民参加という視点を盛り込むべき。

(金城委員)

- 既に素案として提示されている基本コンセプトによくまとめられていると思うが、あえて付け加えるとすれば、各種産業を支える人材の育成という視点が大事であろう。
- 産業を担う企業等は、環境負荷を低減する技術や自然災害に対応する技術の開発等にも積極的に取り組み、それらのノウハウを有する人材を育成すべき。
- ものづくり産業の競争力の強化を前面に打ち出すより、この地域でつくりだした環境負荷を低減するような最新技術を、人材育成を通して積極的に世界に発信していくことも必要では。
- 世界に通用する人材を育て、レベルの高い技術をつくりあげるため、外国人研究者や留学生の受入などを積極的に進める。また、それらの人々に喜んで来てもらうためには、逆に、レベルの高い科学技術の創出と受け入れを容易にする生活環境等の整備も必要。
- 中部圏域を均衡のとれた圏域として発展させるためには、衰退しつつある農山漁村の振興を図り、自然環境の保全にも努めるべき。休耕田、耕作放棄農地、管理放棄林地等をいかに有効に活用し、食料等の自給率を高めていくかという問題も今後の課題であるが、そのための担い手、後継者育成が重要。
- 特に森林の管理技術者の養成は、森林の管理・保全による水資源の確保、景観の保全、災害の軽減さらに二酸化炭素の吸収という視点からも喫緊の課題。

(後藤委員)

- 持続に発展可能な、ということが良いキーワードではないか。
- 中部圏は10年で急激に大きく発展し、成熟的な段階を迎えているが、今のレベルを維持できるかという不安感もある
- 人口減少、少子高齢化、社会資本の老朽化、防災、地球温暖化、地域の中の格差などの

不安感を、少しでも払拭したり、ビジョンを見せていくことが大事ではないか。

- ・人の持続性といった意味で、少子化を担う人の持続性、雇用を担う人の持続性といったことも大事ではないか。
- ・社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を持続させ、培うような様々な整備を考えていくべき。
- ・中部圏が東アジアと、どのような交流のプラットフォームを持つことが強みとなるのかを明示すべき。

（小宮山委員）

- ・人づくり、教育の観点が必要。
- ・大学等の知の活用が必要。知の拠点、文化の拠点、あるいは産業振興のための拠点としての、大学等の支援を活用するという視点を計画に盛り込んではどうか。

（奥野座長）

- ・国民の満足、住民の満足が最終目的なのだというようなことが全体からにじみ出てくる必要がある。

○テーマ2:「中部圏の持続可能な発展戦略とは？」について

①自由討議

（須田委員）

- ・先程の補足。産業中枢圏域の産業の中には、農業、漁業、林業といった、第一次産業も含まれる。よって、農業問題も十分大きな課題になってくる。
- ・これからつくる広域地方計画というのは、陳情型であってはならない。あくまで提案型のものでないといけない。国の計画と対流させながら、国と一緒にやっていくような、提案型のものでなければならない。
- ・三大都市圏的な発想から脱却しなければいけないと考える。二大都市圏と違い、一極集中ではなく、各都市の分担型になっている。中部でないといけない、独自の地域計画にしていくことが大切。
- ・各交通機関の特性を発揮してそれらを補完して、モデル的な地域交通システムをつくるということを考えなければいけない。これから必要な公共投資というのはどんどんと導入してもらい、全国に役立つようにどのように使っていくかということが中部圏の責務。全国にどのように役立てるか、という発想が必要。

（竹谷委員）

- ・この発展戦略の中で新たな公への着目ということが一つセールスポイントになっているのではないか。
- ・新たな公が具体的に機能する仕組みが必ずしも明瞭でないと思う。
- ・新たな公がどういう責任主体として関わられるのか、責任主体としてなりうるかどうかというところで議論が必要。

(奥野座長)

- ・体制については、協会等様々な組織があり、それらを生かすということが根付いているため、日本はそういったことをどう考えていくかということは難しいのではないかと。

(竹谷委員)

- ・私が理事長を務める NPO は住民・行政・企業のパートナーシップ形成により環境改善を進める有力な組織に成長しており、これらの先進事例を参考にしながら、仕組みを考えていきたい。

(辻本委員)

- ・名古屋などの都市圏と農村などとの双方向的な役割の分担が必要。
- ・計画の実効性の担保、土地利用の担保、基本的な理念など、無機質的な仕組みについての議論が必要。

(松尾委員)

- ・キーワードとしての「持続可能」について、何を可能にするかという点で4点ある。1番目は生物多様性（生命の種）、2番目は環境（生存圏が含まれる）、3つ目は経済（生活レベル維持の向上）、4つ目は社会秩序（文化を含む）。
- ・もう一つのキーワード「戦略性」は、先に述べたように1に長期性、2に広域性、3に総合性ということで考えるべき。
- ・持続可能のためには我慢が必要である。戦略的に成長するためには、コスト増も避けられないという認識も必要。また、社会秩序を変えるということも必要となるだろう。ただし、これらに関し可能な限りバランスをとる努力が必要だと思う。
- ・急激でありに過激な戦略は、歴史的にも必ず失敗しているので、バランスをとりながら、地道に安定的に人の価値観を変えるという努力が必要である。具体的に言うと、安心・安全の基盤の上に立ち、環境、経済、文化のバランスのとれた地域を目指す。
- ・中部は、日本の要、世界の要になる宿命であり、要にふさわしい地域への誘導が必要。
- ・その他、必要なキーワード：人口減少に負けない仕組み、国際化の推進、国際競争力、交流連携、地域的な歴史・伝統・文化の再考・再定義（地域価値の再発見）、地域唯一、世界唯一の魅力は万国に通用。

(伊藤委員)

- ・人々が安心して、安全に住み続けることができることが、持続可能な発展に繋がるのではないかと。
- ・中部が、住みたくなる地域、若い人たちが将来を託すにふさわしい地域、喜んでここに住み続けたいという地域になることが大事であり、そのために地域に品格が必要。
- ・「産業首都」というのが大事なキーワードではないかと。産業首都にふさわしい、そこに住みたくなるような都市とは、教育、文化、芸術などのインフラが不足してはいけな。環境面で、中部は多様性に富んでおり、これら個々の性格を生かした環境計画がで

きないか。

(大坪委員)

- ・ 50年後を見据えると、国家は小さくて特定のことしかせず、そのため地方は独立できるようになっていくべき。
- ・ 中部圏は、独自国家としてどうすべきかを念頭に置き、50年後を目指すことが必要ではないか。そうしないと戦略は出てこない。
- ・ 独自性というキーワードは、自立、自助であり、新しい政治的な考え方が重要。
- ・ 50年後、現在のような産業が残っているのかどうか、教育、芸術、文化が中心になった産業が栄えているのかどうかについて議論する必要がある。
- ・ 国際社会が次の50年間でどう変わるかというのが、大きなテーマではないか。ロシア、北朝鮮、中国がどうなっていくのか等、中部圏の戦略を考える上で、重要なテーマではないか。

(金城委員)

- ・ 食料、水、エネルギーの自給に取り組む社会づくり、環境への負荷を低減する循環型社会づくり、イノベーションを支える科学技術の振興と新産業を創出する社会づくり、多文化共生、多生物共生の社会づくりが必要。
- ・ 国土のまんまなかからという視点で今後一層の発展が期待される北東アジアとの交流を考えると、同じく南北軸を形成する北陸圏との連携が重要であろう。
- ・ 多様な自然、歴史、文化、産業を含めた地域資源を生かした観光産業の振興が重要だ。ただ、今までのような目的地を効率的に回遊するパッケージツアーではなく、いわゆるグリーンツーリズム、あるいはエコツーリズムを含む、ゆっくり、じっくり、体験する滞在型のスローツーリズムのコースをつくり、それが可能な環境整備をすることも大事ではないか。
- ・ 美しく暮らしやすい農山漁村の形成と農林水産業の新たな展開を図り、都市と農村の共生と交流を促進する。

(後藤委員)

- ・ 教育の視点が大事ではないか。子供達の品格というものを、色々な格差に関わらず、支えていけるような戦略というものが大切ではないか。
- ・ 新たな公を創出していこうとするときの単位は、地域社会であり、地域社会は非常に重層的なものであるため、一定の圏域であれば、都市部と農村との違いなどをある程度おさえた上で、新たな公や地域コミュニティの議論をしないと、実態と乖離してしまうのではないか。
- ・ 中部圏にある様々な資源を活性化し、つなげていくマネジメントが大事。大きな単位などは行政などの専門的な知識をもった人がマネジメントしていくということが大事であり、小さな新たな公の領域は、民間でもマネジメントできるため、それらを責任主体にしていくようなマネジメントが大事。

(小宮山委員)

- ・ものづくり産業がさらに発展していく中で重要なのは水の確保。
- ・中部の発展を支える地域の水を、地域をあげて確保していく取り組みが必要。
- ・地域の方々、企業の方々が一体となって山を守ろう、自然を守ろうという動きが出ており、素晴らしいこと。このような取り組みを圏域をあげて行い、一つのモデルを作ってはどうか。

(奥野座長)

- ・中部圏の各地域の文化と伝統を守っていくことが非常に大事。
- ・限界集落は、それをどう守るかということは難しいところだが、守れるところは守る。また、消滅するところについては、そこにあった文化、伝統をどのように継承していくかということが大事。
- ・新たな公について、首長が参加の機会をつくっていくことが大事。

5) その他

(事務局：上田中部圏広域地方計画推進室長)

本日の、重要な論点、キーワード、ご意見を、準備会の議論の中で取り込んでいきたい。

3. 閉会

(中部運輸局：谷山局長)

- ・全国計画の方の予定がまだ明確なスケジュールはでていない
- ・9月頃に今日のご意見を参考にさせていただき、次回の学識者会議を開催させていただく予定。